佛教研究第7號（1978年2月）抜刷

Pāli *Jātaka* に於ける *mātrāchandas* の性格

阪　本　純　子

Pāli *Jātaka* に於ける *mātrāchandas* の性格

阪本純子

（京都大学大学院院生）

目　次

（上記3章は ***mātrāchandas*** の韻律規則を論じたものである。text に現れる具体的形態は，続編 §4 Pāli ***Jātaka*** に於ける ***mātrāchandas*** の形態，§5 text の修正と metrical licence，に於て扱われる。）

<略語と記号>

———特殊な略語・記号だけを記載する。他は慣用に従う。———

Pa.	Pāli
ja.	jātaka（普通名詞）
Ja.	Jātaka（固有名詞）
E	The Jātaka together with its Commentary. I—VI ed. V. Fausbøll (London 1877—96); VII (Index) ed. D. Andersen (1897). ———B^{dsf}（ビルマ文字）及び C^{ks}（セイロン文字）の各写本に基く。
D	The Jātaka: Nāranda Devanāgarī Pāli Series III 1—2, ed. D. Kashyap (Bihar Government 1959).
Alsdorf, (L.)	"Das Jātaka vom weisen Vidhura", WZKS 1971, p.23-56.
Apte, (V.S.)	The Practical Sanskrit-English Dictionary (Poona 1891), Appendix A: Sanskrit Prosody.
Bollée, (W.B.)	Kuṇāla-Jātaka, Text and Translation (PTS 1970).
He.	Hemacandra: Chando'nuśāsana (v. infra p.21 n.1)
Jacobi, (H.)	"Über die Entwicklung der indischen Metrik in nachvedischer Zeit", ZDMG 1884, p.590—619.

Jayadāman	ed. H. D. Velankar (Bombay 1949).——Ke., Jd., Jk. 及び He. の 4 text を含む。
Jd.	Jayadeva: Jayadevacchandaḥ (v. infra p.21 n.1)
Jk.	Jayakīrti: Chando'nuśāsana (v. infra p.21 n.1)
Ke.	Kedārabhaṭṭa: Vṛttaratnākara (v. infra p.21 n.1)
Pi.	Piṅgara: Chandaḥsūtra (v. infra p.21 n.1)
Smith, (H.)	Saddanīti IV (Lund 1949), p.1148—72 : E. Conspectus Terminorum (Metricorum).
Vutt.	Saṅgarakkhita Thera: Vuttodaya (v. infra p.21 n.1)
Warder, (A.K.)	Pali Metre (PTS 1967), spec. Chap.V: Mattāchandas.
Weber, (A.)	Über die Metrik der Inder: Indishe Studien VIII (Berlin 1863), spec. p.157—457.

ach.	*akṣaracchandas*
āpāt.	*āpātalikā*
aup.	*aupacchandasaka*
cad.	*cadence* (v. infra p.20)
gch.	*gaṇacchandas*
jag.	*jagatī*
m.	*mātrā*
mch.	*mātrāchandas*
opg.	*opening* (v. infra p.20)
pd.	*pāda*
śl.	*śloka*
sync.	*syncopation* (v. infra p.17)
tri.	*triṣṭubh*
vait.	*vaitālīya*
veg.	*vegavatī*
数字	各 *ja.* 内部の詩節番号
数字左肩の °	その詩節が *vait.* ではなく *aup.* であることを示す。
a, b, c ……	第 1, 2, 3, …… *pd.*
⏑	韻律上軽い音節
—	韻律上重い音節

(⏓ 或いは ⏑⏑/— は，それぞれ⏑と — 或いは ⏑⏑ と — の両方の形が許されることを示す。)

,	韻律上の休止（但し，詩節の終りでは.）
〈 〉	原文への添加
母音の上の▲	短母音の長母音化

母音の上の⌣　　長母音の短母音化
母音の上の〜　　軽音節として扱われる母音＋鼻音
C_1 〈V〉 C_2　　svarabhakti（子音結合 C_1 C_2 中への母音 V の挿入） e.g. t〈u〉v

〈本稿で用いる韻律用語について〉

本稿で用いる韻律関係の術語について簡単に説明する。（韻律の分類並びに術語は韻律書により若干の相違を示すが，ここでは最も一般的用法に従う。）Pāli の韻律は，*mātrāchandas* の著しい発展を見る Prākrit の韻律にではなく，本質的に Sanskrit の韻律に属し，Veda の韻律から古典 Skt. の韻律へと移行してゆく過渡期に位置づけられる。従ってその術語も Skt. の術語とよく対応するので，以下 Skt. 名称を用いて記す。

1詩節は原則として4つの *pāda*（詩句：a・b・c・d）から成る。各 *pd.* 末及び韻律によっては *pd.* 内部の特定の位置に，*yati*（休止：，）が設けられる。韻律は，*pd.* を構成する音節の数，音節の軽重，*mātrā*, *gaṇa* などによって規定される。

音節の軽重は次のように定められる。1) 長母音（*pluta* を含む），2) 子音結合により後続される母音，3) *anusvāra* を伴う母音，4) 子音を伴って終る母音，5) *visarga* を伴って終る母音，以上のような母音を有する音節は重い（*guru*：—）。それ以外の音節は軽い（*laghu*：⌣）。一般に *pd.* 末の音節は，実際の音価にかかわらず重音節として扱われるが，若干の例外もある（本稿で論じる範囲内では常に重音節としてよい；⏓ 或いは — のいずれの表記も可）。（*Pi.* I 7—8, 21—25；*Ke.* I 9—10; cf. *Weber* p. 211—6, 219—26.）

なお Pa. では，上記のような重音節を作る〈母音＋*anusvāra*〉と並んで，音節を重にしない軽い鼻母音（e.g. ã）が韻律上設定される。

mātrā は，韻律における時間的単位で，1 *laghu* は 1 *m.*，1 *guru*＝2 *laghu* 即ち 2 *m.* と勘定される（cf. W. S. Allen：Phonetics in Ancient India, London 1953, p. 83—7）。

gaṇa は一定の *m.* を含有する音節群であって，Skt. では 4 *m.* の *gaṇa*（1) ⌣⌣⌣⌣; 2) — —; 3) — ⌣⌣; 4) ⌣⌣ —; 5) ⌣ — ⌣ 又は ⌣，⌣⌣⌣）が用いられる。

古典 Skt. 韻律（*chandas*）は普通三大別される：1) *akṣaracchandas*（各 *pd.* を構成する音節の数と軽重によって規定される韻律）; 2) *mātrāchandas*（各 *pd.* の保有する *m.* 数により規定される韻律）; 3) *gaṇacchandas*（各 *pd.* を構成する *gaṇa* により規定される韻律）。（1）を *vṛtta* 又は *varṇavṛtta*, 2) 3) をまとめて *jāti* 又は *mātrāvṛtta* として二大別する説もある，cf. *Weber* p. 179 sq., 288 sq.）

1) *ach.* は更に，a) *samavṛtta*（4 *pd.* の構成が同一），b) *ardhasamavṛtta*（a

と c，b と d の構成がそれぞれ同一），c）*visamavṛtta*（4 *pd.* の構成がすべて異なる）の三種に分けられる。2）*mch.* も，*samavṛtta* である a）*mātrāsamaka* 類と，*ardhasamavṛtta* である b）*vaitālīya* 類とに二分される。前者は Pa. で用いられないので，本稿で扱う *mch.* は b）*vait.* 類に限られる。*gch.* は，4つの *pd.* ではなく2つの *pādayuga* から成り，*āryā*（v. infra p. 9 n. 4）に代表される。

以上の古典 Skt. 韻律は，Veda 韻律を母胎とし，民間音楽の影響を受けながら発展してきたものである。特に *mch.* と *gch.* は，Veda 韻律の圏外にあった民間音楽を起源とすると推測されている。（V. infra p. 21）。

Veda 韻律はもっぱら音節の数によって定められ，個々の音節の軽重については，一定の傾向が看取されるものの，古典 Skt. 韻律の場合のように厳格に固定されていない。その中でも特に後代に大きな影響を及ぼしたものは，*anuṣṭubh*（8音節×4），*triṣṭubh*（11音節×4），*jagatī*（12音節×4）である。*anuṣṭubh* は後に epic の *śloka* に発展し，以後代表的 Skt. 韻律として隆盛を誇る。*tri.*/*jag.* も *śl.* と並んで愛好され続け，ここから多くの重要な *ach.* が生み出された。

Pa. canon で用いられる一般的な韻律は，*śl.*，*tri.*/*jag.*，*gch.*（*āryā*），*mch.*（*vait.* 類）であり，この順序で頻度が減少する。これらはいずれも古典 Skt. 韻律よりもはるかに古い発達段階に属し，一般に，古典 Skt. 韻律の規則の厳格さに対して，作詩上大きな自由が許される事を特徴とする。他にいろいろな種類の *ach.* も散見されるが，古典 Skt. 的な完成には達しておらず，絶対量も少ない。Pa. に見られる *śl.*，及び *tri.*/*jag.* の最も一般的な形式は次の通りである。

śl.　ac：⏓⏓⏓⏓⏑———；bd：⏓⏓⏓⏓⏑—⏑—.（但し第2・第3音節の⏑⏑，及び bd 第3・第4音節⏑—は避けられる。ac には幾つかの変化形が許される。）

tri.　⏓—⏓—⏓⏑⏓—⏑——×4.

jag.　⏓—⏓—⏓⏑⏓—⏑—⏑—×4.

――――Skt. 韻律の概説としては，*Apte*；*Jayadāman*, Intro. と List；*Weber.* 極く簡略な要約としては，e.g. L. Renou et J. Filliozat : L'inde classique II (Paris-Hanoi 1954), appendice 2；A Macdonell : A Sanskrit Grammar for Students (3rd. ed. London 1927), Appendix II. Pa. 韻律に関しては，*Smith* 及び *Warder* がある。――――

§1 序

初期仏教文献の韻文を扱う際に韻律の考察が不可欠の前提とされるという認識は，F. Edgerton[1] 及び H. Smith[2] らの諸業績以来，現在では既に常識となった観がある。韻律の研究は，単に text を批判し適正な edi-

tion を定めるのに必要なばかりでなく，そこに用いられている言語の正確な形態を指し示す事によって，未だ十分な解明に至っていない BHS 及び Pa. 語の研究に光を投げかけ，同時に韻律使用状況の比較対照を通じて text の成立事情の解明に1つの客観的証拠を提供するものでもある。

初期仏教文献に用いられる諸韻律の中，最も一般的で且つ起源の古い *śl.* 及び *tri.*/*jag.* については，早くから H. Oldenberg[3] を始めとする西欧の研究者達によりその性格と歴史が明かにされてきた。他方，*āryā* により代表される新しい韻律 *gch.* の類は，仏教文献に於ては極めて用例が限られ，且つ又著しく伝承途上の損傷を被ってはいるものの，古典 Skt. 及び Pkt. の文献で愛用されたために，土着韻律学により明確な規則を与えられてきた。加えて，H. Jacobi[4] により土着韻律学には知られていなかった古い段階の *āryā* が発見され，*āryā* の成立過程が明かにされた（v. infra p. 9 n. 4）。この業績を受け継いだ L. Alsdorf[5] は，Pa. canon 全体並びに Jaina *Uttarajjhāyāsutta* 中の全 *āryā* 詩節の検討によって，Pa.・Ardhamāgadhī 文献に用いられている *āryā* の全貌を明かにし，新 *āryā* の使用が一般に text の成立の新しさと対応する事を証明したのである。

ところで，最後に残る韻律 *mch.* については事情ははるかに困難である。第一に，初期仏教文献中に残されている用例が，少数と言われる *gch.* よりも更に一層少ない。第二に，古典 Skt. に見られる用法は，*mch.* という名称に窺われる本来の性格から逸脱して，むしろ実質的には *ach.* の方向へ変質し，Pa. に見られる実態とははるかに隔ってしまっている（v. infra § 2）。それ故に，長い伝承過程を経て現在に至るまで，Pa. canon に於ける *mch.* の規則ははっきりしないまま放置されて，写本自体も極めて崩れた形状を示す一方，近代の校訂出版に際しても往々にして不注意な取扱いを受けて来た（この問題に関しては別稿 § 4 で扱う）。

とは言え，近代の研究者が全くこの韻律の究明に手を着けなかった訳ではない。早くに *Jacobi* (spec. p. 591—5) は，Pa., Jaina 及び古典 Skt. の各文献中の *mch.* を調査し，その性格と成立過程を推測した。しかし彼の仮説は，論考の材料たる Pa. *vait.* 類—— *Dhammapada* (ed. V. Fausbøll, Copenhagen 1855), Appendix の30詩節——が少数過ぎる事，及びこの材料から導き出された韻律形式が余りに窮屈で全 Pa. *vait.* 類の実態を覆い切れないという欠点から，現代の研究者がそのまま踏襲する事はできないであろう。(*Jacobi* 並びに *Smith*, *Warder* の具体的検討は，v. infra § 3。)

次いで，*Smith* が *Saddanīti* の附録として呈示したもの（spec. 8.4—8.4.2,6）は，Pa. *vait.* 類の多様な形態を実例と共に網羅し，示唆に富む注記を伴い，その全体像の把握と実際の韻律分析とに大きな手助けとなるが，韻律形式設定の根拠が十分論ぜられず，重要な問題が残されたままになっている。

最後に，特にこの韻律を重点的に取上げた研究としては，*Warder* がある。即ち，主要経典中の *vait.* / *aup.* 約350詩節（1420 *pd.*）を分析し，その統計に基いて Pa. *mch.* の性格を考察し，更に text の年代関係を推定しようとするもので，材料の豊富さと論述の詳しさではこの種の研究として随一のものである。しかし，まことに残念な事に，彼の統計表には単に形態毎の occurrence の合計数が掲げられているだけで，具体的な出典並びに当然加えられたに違いない幾多の text 訂正の指示が一切欠如しているために，読者が彼の分析結果を再検証する道が全く閉ざされている。周知のように，初期仏教文献の校訂出版は，写本並びに語学上の時代的制約により，その大多数が今日の水準に於ては不完全なものであるから，韻律分析は常に text の批判及至は言語学的考察と相関し，研究者の主観的判断に依存する程度が高い。従って，具体的な出典と text 訂正の指示を欠いた統計は，研究の出発点として極めて不確実なものとならざるを得ない。

さて，以上のような諸研究者の業績により，Pa. *mch.* の基本的様態はおおむね捕捉されてはいるが，*mch.* の本質に関わると同時に実際の text 分析に際して大きく結果を左右する幾つかの重要問題に関しては，未だ十分な客観的根拠に基く解答が与えられていない。

筆者に先に，Pa. *Ja.* 全体を通じて *mch.* 約90詩節とそれらを含む各 *ja.* を検討し，その範囲内に於て最も妥当と思われる *mch.* の規則を探ってみた。もとよりこの量は Pa. *mch.* 全体の一部分に過ぎず，Ja. という 1 text の性格にも支配され，これだけの材料で Pa. *mch.* の諸問題を解決する事は到底不可能である。従って，本稿で呈示するものも飽くまで暫定的な仮説に過ぎないが，将来のこの課題解決のための1つの資料として，上記の結果を要約したい。筆者の知識と経験の不足から，又用いた edition[6] の範囲の狭さから，当然異論やより適切な解釈もある筈である。韻律分析を更に他の text に押し進めるに従って，筆者自身改正すべき点も出てくると思う。研究者各位の御批判を切に乞う。

なお，個々の *ja.* 内部に於ける *mch.* 詩節と他の韻律の詩節との関係の検討は，現存する *Ja.* の成立諸層を明かにする上で大変重要な役割を

果たすものであるが，この問題に関しては稿を改めたい。

——前述の理由から，扱うすべての詩節に対して text とその修正を示す事が望まれる。本稿では，韻律規則制定に関わる特に重要な詩節に限り論じるが，続編§4・§5に於て，番号と記号を用いて全 mch. 詩節が記載される予定である。——

——§1　注——

1. Spec. "Meter, Phonology and Orthography in Buddhist Hybrid Sanskrit", JAOS 1936, p. 197—206 ; Buddhist Hybrid Sanskrit Grammar and Dictionary (New Haven 1953).

2. Spec. Saddanīti … (v. 略語と記号 s.v. *Smith*); "Les deux prosodies du vers bouddhique", Human. Vetenskapssamfundets i Lund Årsberättelse 1949—50, p. 1—43 ; "Retractationes rhythmicae", Studia Orientalia 1951, p. 3—37; "Analecta Rhythmica", Studia Orientalia 1954 (入手できず未見).

3. Spec. "Bemerkungen zur Theorie des Çloka", ZDMG 1887, p. 181—8; Die Hymnen des Ṛigveda I. Metrische und textgeschichtliche Prolegomena (Berlin 1888); "Zur Geschichte des Śloka", NG 1909, p. 219—46; "Zur Geschichte der Triṣṭubh", NG 1915, p. 490—543.

4. Spec. "Über die Entwicklung…" (v. 略語と記号 s.v. *Jacobi*); "Zur Kentniss der Āryā", ZDMG 1886, p. 336—42.

5. "Itthīparinnā", IIJ 1958, p. 249—70; The Āryā Stanzas of the Uttarajhāyā (Mainz, Akad. d. Wiss. u. d. Lit. Abh. Geistes- u. Sozialwiss. Kl. Jg. 1966 Nr. 2, p. 153—220); Āryā Stanzas in the Thera-Therī-Gāthā (Appendix II in The Thera- and Therī—Gāthā, 2nd. ed. PTS 1966) ; Die Āryā-Strophen des Pali-Kanons (Mainz, Akd. … Jg 1967 Nr. 4, p. 243—331.)

6. 上記の外に，個別 text に於ける具体的な *mch.* を扱った論文としては，L. Alsdorf: "Uttarajjhāyā Studies", IIJ 1962, p. 110—36; "Das Jātaka … (v. 略語と記号 s.v. *Alsdorf*). 特に後者は，本稿でも扱う重要な 1 *ja.* (N. 545 *Vidhurapaṇḍita-ja.*) の詩節の構成を論じたものであるが，*Vait.* の規則に関しては *Warder* に全面的に頼っているようである。筆者の検討結果とは必らずしも一致しない (v. infra §3 2.2. i) ; 3.1. ii) b) ; 別稿 §4 3.2. ii))。

6. Pa. canon の検討に際してのビルマ文字・タイ文字・セイロン文字の各版の重要性は広く認識されているにもかかわらず，本稿のために利用する事ができず，辛うじて D によりビルマ文字版の形を窺うに留まった。上記諸版の検討が緊急の課題として残されている。

§2　土着韻律書に於ける vaitālīya 類の規定

Pa. canon に見られる *vait.* 類の実態を考察する前に，まず土着韻律書の与える規定を概観したい[1]。

Piṅgala 以来の Skt. 韻律書は，*vait.* 類に対して *mch.* としての一貫した規定を与えている。この規定は，Pa. *vait.* 類の実態と比較すればかなり窮屈なものになってはいるが，なお *m.* の制限内での音節形態の自由を残している。ところが，Skt. 文献での実際の適用に際しては，この韻律は，音節の数と軽重の固定した *ach.* への道を自ら進むと共に，その諸変化形から多種多様な *ach.* を生み出すに至る。このような状況を反映して，韻律書も又，*mch.* としての規定を与えると同時に，これとは別に，*ach.* 化した *vait.* 類をも記載している。

まず，*mch.* としての *vait.* 類に与えられる伝統的規定は次の通りである。

1）1詩節は 4 *pd.* から成り，ac では 6 *m.*，bd では 8 *m.* のあとに，a) —◡—◡— の付加された韻律が *vait.*，b) —◡—◡—— の付加された韻律が *aupacchandasaka*，c) —◡◡—— の付加された韻律が *āpātalikā*[2] である（*Pi.* IV 32, 33, 34；*Ke.* II 12, 13, 14；*Vutt.* 28, 29, 30）。

2) ac の初めの 6 *m.*，bd の 8 *m.*（i.e. *opening* v. infra §3 1.1.）に於て，a) 偶数番目の *m.* と次の *m.* が結合して1つの重音節を形成してはならない[3]（*Pi.* IV 35；*Ke.* II 12）。b) bd で6つの軽音節が連読してはならない[4]（*Pi.* IV 36；*Ke.* II 12；*Vutt.* 28）。

3） 2) a) に対する例外として次の形が認められる[5]（*opg.* だけを示す）。

a) ac ◡—◡◡◡…，bd ◡—◡◡◡◡◡…：*dakṣiṇāntikā*[6]（*Ke.* II 15; *Vutt.* 31）。

b) ac ◡—◡◡◡…，bd 2) に従う：*udīcyavṛtti*（*Pi.* IV 38；*Ke.* II 16; *Vutt.* 32）。

c) ac 2) に従う，bd ◡◡◡—◡◡◡…：*Prācyavṛtti*[7]（*Pi.* IV 37；*Ke.* II 17；*Vutt.* 33）。

d) ac ◡—◡◡◡…，bd ◡◡◡—◡◡◡…：*Pravṛttaka*[7]（*Pi.* IV 39；*Ke.* II 18；*Vutt.* 34）。

e) abcd ◡—◡◡◡…：*cāruhāsinī*[8]（*Pi.* IV 40；*Ke.* II 20；*Vutt.* 36.）。

f) abcd ◡◡◡—◡◡◡…：*aparāntikā*[7),8)]（*Pi.* IV 41；*Ke.* II 19；

Vutt. 35)。

以上の規定はどの韻律書にもほぼ共通するが，その外に，*Jk.* VI 26 及び *He.* III 62—64 は特異な一変種 *māgadhī*（及びその同族）を記載している。*māgadhī* の形式は，ac：8 *m.* ＋ ⏑ ⏑̲⏑̲ ⏑ –，bd：10 *m.* ＋ ⏑ ⏑̲⏑̲ ⏑ –。即ち，*vait.* の後半 – ⏑ – ⏑ – の第1と第2の重音節が固定されていない。更に，2) a) の制約をも免れている。従って，上記 *vait.* に比べ非常に大きな形態上の自由を享受し，筆者の想定する Pa. *vait.* の範囲をさえも越えている（v. infra §3 3.1. ii)）。*vait.* の Pkt. 名 *māgadhikā*（v. infra p.21）に酷似する名称からも，又 *Jk.* 及び *He.* がいずれも Jaina 教徒である事（cf. *Jayadāman* p.37,41）からも，この *māgadhī* が Skt. 韻律に取り入れられる以前の *vait.* の前身に何らかの関わりを持つのではないかと想像される。

ところで，古典 Skt. の実際の用例では，*m.* の枠の中である程度の自由が許されている筈の *opg.* が，実質的には，ac：⏑̲⏑̲ – ⏑ ⏑，bd：⏑̲⏑̲ – – ⏑⏑ にすっかり固定される。この中でも特に ⏑⏑ で始まる形に集中し，全音節が完全に固定された形を取るに至って，*mch.* の性格をすっかり失ってしまう（*vait.*：⏑⏑ – ⏑⏑ – ⏑ – ⏑ –，⏑⏑ – – ⏑⏑ – ⏑ – ⏑ – × 2；*aup.*：⏑⏑ – ⏑⏑ – ⏑ – ⏑ – –，⏑⏑ – – ⏑⏑ – ⏑ – ⏑ – – × 2)。

Pi. 及び *Ke.* の本来の部分はこの *ach.* 化された *vait.*/*aup.* に触れていないが，*Ke.* の増補部分及び *Jk.*，*He.* のような比較的新しい韻律書は様々な名称のもとにこれを採録している[9]。

上記の *ach.* 化された *vait.*/*aup.* とは別に，ac：– – ⏑⏑，bd：– – – ⏑⏑ で始まる *aup.*（*bhadravirāj*），ac：⏑⏑ ⏑⏑ ⏑⏑，bd：⏑⏑ – ⏑⏑ ⏑⏑ で始まる *vait.*（*aparavaktra*），同じく *aup.*（*puṣpitāgrā*）の 3 *ach.* が *Pi.* 以下の韻律書に掲載され，のみならず，*Ke.* 自身（II 10）が *aparavaktra*＝*vait.*，*puṣpitāgrā*＝*aup.* であると明記している[10]。又 *syncopation*（v. infra §3 3.1.）を伴う *vait.*（supra *aparāntikā*）からは *rathoddhatā*[11]（– ⏑ – ⏑⏑⏑ – ⏑ – ⏑ – × 4）が発生する。

同様に *āpāt.* からも，*vegavatī*（⏑⏑ – ⏑⏑ – ⏑⏑ – –，– ⏑⏑ – ⏑⏑ – ⏑⏑ – – × 2），*svāgatā*（– ⏑ – ⏑⏑⏑ – ⏑⏑ – – × 4）等の *ach.* が得られる。

以上の諸韻律は，*vait.* 類から直接導かれる *ach.* であるが，それ以外にも，*vait.* 類の影響を直接間接に受けて形成された *ach.* は数え切れない。

以上のように，土着韻律書の与える *vait.* 類の像は，*mch.* から *ach.* までの大きな振幅を示し，時代が下るに従って *vait.* 類から発生した *ach.* の掲載数が増大する傾向が見られる。

最後に，*vait.* の起源と名称について一言する。*mch.* に見られる *m.* の概念，並びに ◡◡＝— の互換の原理は，Veda 韻律には全く知られていないものであり，民間音楽の影響を受けて成立した事は間違いないであろう。同時に，固定された後半のリズム —◡—◡— に Veda 以来の伝統的韻律（spec. *jag.*）の名残りが見つけられる事も事実である。恐らく民間起源の音楽的な韻律が，後半に伝統的リズムを固定される事によって Skt. 韻律に取り入れられたと推測される。

更に又，*vait.* の Pkt. 名称 *māgadhikā* からは，"*vaitālika*＝*māgadha*（吟遊詩人，宮廷詩人）" 及び *Magadha* 地方との密接な関係が予想される。この予想は，Pa. 及び Ardhamāgadhī の *vait.* 詩節に特徴的に現れる，いわゆる "Māgadhism"（nom. sg. -e 及び r の代りの l）によっても裏付けられる[12]。

—— §2　注 ——

1. Cf. *Weber* spec. p. 307—14（: *Pi.* IV 32—41), p. 358—68（: do. V31—44); *Jayadāman*（*Ke.*, *Jd.*, *Jk.*, *He.* の 4 text と詳しい序文及び一覧表)。以上の外に用いた text は，*Pi.* ed. Viśvanātha Śāstri : Bibl. Ind. new series N. 230, 258, 307（Calcutta 1874); *Ke.* ed. Vaidyanāthaśāstrī（Benares 1927); *He.* ed. H.D. Velankar（Bombay 1961). Pa. 韻律学に関しては，*Vutt.* ed. G.E. Fryer（Calcutta 1877);『ヴットーダヤ』訳註，ed. & tr. 片山一良，仏教研究第3号 1973　があるが，前者は入手できず未見。

2. 近代の研究者には，不思議にこの *āpāt.* は無視されている。*Smith* は，ほぼ同じ形の韻律を，*āpāt.* ではなくて Proto-*veg.* として扱う。V. infra §3 1.3.i).

3. 即ち *sync.*（infra §3 3.1.）が許されず，常に ◡◡ ◡◡ ◡◡ (◡◡) で書き表わされる形を取る。この規定は，*Pi.*, *Ke.*, *Jd.*, *Jk.*, *He.* などほとんどすべての主要韻律書に明記されているにもかかわらず，Pa. 韻律書 *Vutt.* に限り無視されている。*Vutt.* は古典 Skt. 韻律学，とりわけ *Ke.* の強い影響下に著されたものと言われているが（*Smith* 8.4.），それにもかかわらずこの規定に限り *Ke.* etc. に背馳するのは，Pa. *vait.* 類の実状を考慮したためであると思われる。実際に *Vutt.* 28^b の条文自身がこの制限規定に抵触する形を示している（v. infra §3 3.1. iii))。なお *Weber*（p. 308sq.）が，この規定により排除される *opg.* の形として ac: ◡——◡, bd: ◡———◡ しか挙げていないのはおかしい。1つでも偶数番目の *m.* が次の *m.* と結合していれば（e.g. ac: ◡—◡—）許されない

筈である（v. infra §3 3.1.iii))。

4. この制限規定に対する諸研究者の扱いに関しては，v. infra §3 3.2.c.i).

5. a)〜f) の特殊形が *vait.* にだけ許されるという解釈と，*vait.*・*aup.*・*āpāt.* の三者すべてに適用されるという解釈の両方がある(cf. *Weber* p.312 ; *Jayadāman* p.157)。Cf. infra n.8.

6. *Pi.* には欠如している。従って *Pi.* の許す 2) a) に対する例外形は，ac: ◡ — ◡ ◡◡ …, bd: ◡◡ ◡ — ◡ ◡◡ …に限られる。この事実は *opg.* の構造に関して極めて示唆的であり，*Warder* の “Proto-*gaṇa*” 区分に対立する。

7. *Vutt.* 33,34,35 の規定に従うと，c) d) f) の bd の形式は — ◡ — ◡ ◡◡ …となり，上記の形式 (*Pi.*, *Ke.*) よりも狭くなる。

8. *Jk.* (VI 14,15,19,20,24,25) 及び *He.* (III 59,60) に従うと，*vait.*・*aup.*・*āpāt.* の各奇数 *pd.* ×4，或いは偶数 *pd.* ×4 から成る韻律はすべて *cāruhāsinī* 或いは *aparāntikā* と呼ばれる（cf. *Jayadāman* p.157sq.）。

9. Cf. *Jayadāman* p.149 sq.c.n.

10. *bhadravirāj* と *aup.* の関係についても *Halāyudha* (*Pi.* 注釈) が記している。奇妙な事に，*bhadra.* に対応する *vait.* 形は知られていない。*pd.* の初めと終りの対称性がここに考慮されるかも知れない(cf. *Warder* §172)。*aparavaktra* と *puṣpitāgrā*に見られるような軽音節の連続は伝統的に回避されてきたものであるが，このリズムの目新しさから上記2韻律は早くに *vait.* 類から独立して *ach.* 化したものらしい（v. infra §3 3.2.i))。

11. *Jacobi* (p.610) はこれを *jag.* から導くが賛成できない。

12. *vait.* の起源に関しては，cf. *Jayadāman* p.12 sq.,24, 27 sq.; *Warder* §115—21; *Alsdorf* p.27—9. *vait.* の語原については様々な説明がなされてきた，cf. *Weber* p.295, 310 n.; *Jacobi* p.593 n.1. *vait.* に於ける Māgadhism については cf. *Alsdorf* loc.cit. *Ja.* では次の箇所に見出される: N.388 *Tuṇḍila-ja.* 1^{ac}; N.545 *Vidhurapaṇḍita-ja.* 3^{c} 5^{c} 7^{abc}.

§3 Jātaka に見られる*mātrāchandas* の規則

Ja.[1]中に筆者が検討した *mch.* の詩句は，*vait.* 209 *pd.* と *aup.* 144 *pd.* の計 353 *pd.* である[2]。これらの材料に基いて Pa. *mch.* の規則を探ってみたい。

1. 《定　義》

1.1. 1詩節は 4*pd.* から成る。ac は 14*m.*, bd は 16*m.* を有する。各 *pd.* は，音節形態の自由な前半 *opening* と，固定された後半 *cadence* — ◡ — ◡ — とに分けられる。以上のような韻律が *vait.* である。

	〈*opening*〉		〈*cadence*〉
ac	6*m.*	+	— ◡ — ◡ — = 14*m.*
bd	8*m.*	+	— ◡ — ◡ — = 16*m.*

i）但し，特殊な場合に限り，bd に 9*m.* の *opg.*（*pd.* 全体で 17*m.*）が認められる（infra 2.2.）。

1.2.　*vait.* の *cad.* — ◡ — ◡ — の代わりに — ◡ — ◡ — — を持つ韻律が *aup.* である。各 *pd.* は従って 2*m.* ずつ増える。

1.3.　*vait.* の *cad.* — ◡ — ◡ — の代わりに — ◡ ◡ — — を持つ韻律が *āpāt.* である。各 *pd.* の *m.* 総数は *vait.* と変わらない。

i）土着韻律学の規定に従う（supra p.23 c.n.2)。他方，*Smith* はこのような韻律をむしろ proto-*veg.* の名で載録しており（8.7.2,9)，*āpāt.* の名では *ach.* の形（— — ◡ ◡ — ◡ ◡ — —，◡ ◡ — — ◡ ◡ — ◡ ◡ — — × 2）を与える（8.7.2,11)。*vait.* の一変種として，cad. — ◡ ◡ — — を伴い，他の点は *vait.* に準ずる韻律が存在し，そこから Skt. の *veg.*，*svāgatā* 等の *ach.* が発生した事は疑い得ない。これらの *ach.* 中 *veg.* が最も愛好されたところから，*Smith* は proto-*veg.* を考えたのであろうが，*Pi.* 以下の韻律書の規定に依拠して，*āpāt.* の存在を予想するのが妥当であろう。現実には，*Ja.* 中に上記のような完全な *āpāt.* 詩節は見つけられない。しかし，*vait.* 中に見出される異例の *cad.* — ◡ ◡ — — 又は — — ◡ ◡ — を検討する際に，*āpāt.* の存在を考慮する必要がある（infra 4.2.c.i))。

ii）*vait.*，*aup.*，*āpāt.* の間には，*opg.* に現われる形態の傾向に若干の相違が予想されるが，筆者の調査段階では明かでない（cf. *Warder* §172, §173)。以下の *opg.* に関する記述は，三者に対して共通に適用される。

2.　《bd に関する附則》

2.1.　bd の *opg.* は，ac の *opg.* の前に 2*m.* の *base* $\overline{◡◡}$ が付加されたものと理解される。

i）上述のように bd の *opg.* を *base*＋6*m.* に分解する事は，全く韻律構成解釈上の便宜に過ぎず，現実の text に現われる *opg.* が常にこのように分けられるという意味ではない。たとえば *sync.*（infra 3.1.）は，*base* と次の 2*m.* との間にも，他の位置に於けると同様に起っている。

pd. の内部構成に関しては，様々な見解が表明されている。*Jacobi* は，各 *pd.* を "Auftakt" と2つの "Fuss"（— ◡ ◡ — と ◡ — ◡ —）に分解するが，その根拠は十分に論じられていない（ac : $\overline{◡◡}$，— ◡ ◡ —，◡ — ◡ —; bd : {— ◡ — / ◡◡ —}，— ◡ ◡ —，◡ — ◡ —)。*Smith* は，ac を 4*m.*＋4*m.*＋6*m.*（◡ — ◡ —）の 3 *gaṇa* に，bd を *base*＋前記 3 *gaṇa* に分解するが，この理由も明かにされていない。*gaṇa* の概念を *mch.* に導入する必然性が筆者には感じられない。又，*opg.* の一部と *cad.* の一部を組合せて1つの *gaṇa* 及至は "Fuss" を作る事は，*opg.* と

cad. の境界をあいまいにするので好ましくない。

他方 *Warder* は，*Smith* の上述の *gaṇa* 区分に対抗して，ac を 2*m.*＋4*m.*＋*cad.* に，bd を 4*m.*＋4*m.*＋*cad.* に分解し，この 4*m.* の音節群を “proto-*gaṇa*” と称する（§158 sqq.）。*cad.* を *opg.* から分離する事には筆者も賛成であるが，*opg.* を “proto-*gaṇa*” に分ける理由が説得力を欠くようである。彼が根拠とする自身の統計結果は次の通りである：ac *opg.* a) ◡◡ ◡◡ ◡◡ 83%, b) ◡◡ ◡ — ◡ 5.5%, c) ◡ — ◡ ◡◡ 3 %; bd *opg.* a) ◡◡ ◡◡ ◡◡ ◡◡ 82〜3%, b) ◡◡ ◡◡ ◡ — ◡ ◡ — ◡ 及び ◡ — ◡ ◡◡ ◡◡ 3 %, c) ◡◡ ◡ — ◡ ◡◡ 4 %. b) は *opg.* の *Warder* 式区分に有利であり，c) は逆に不利である。a) は中立である。b) 対 c) の比率は誤差を考慮するとほぼ同等である。従って，上の統計結果からは *Warder* の結論を引き出す事はできない。

この点に関して興味深いのは，土着韻律書の *sync.* に関する記述である（supra p. 23 c. n. 6）。即ち，*Pi.* は，ac の *opg.* に対しては ◡ — ◡ ◡◡，bd の *opg.* に対しては ◡◡ ◡ — ◡ ◡◡ という *sync.* の形しか許していない。*Ke.* 以降の韻律書は，更に bd ◡ — ◡ ◡◡ ◡◡ という形を付け加えるが，ac に ◡◡ ◡ — ◡ を認める事はない（*Vutt.* は例外，v. supra p. 21 n. 3）。この事実は，*Warder* 式の区分よりもむしろ *Smith* 式の区分を支持するものの如くである。

しかし，いずれにせよ，筆者の現在の調査段階では，*opg.* 内部に “Fuss”，“*gaṇa*”，“proto-*gaṇa*” 等の概念を持ち込む必要性が認められない。

2.2.　一般的な 2*m.* の *base* ◡◡ の代わりに 3*m.* の *base* ◡ — 又は — ◡ が用いられ，その結果 bd が 17*m.*（*opg.* が 9*m.*）を有する事がある。

i)　17*m.* を有する bd の正当性は大いに論議を呼ぶ問題である。土着韻律書は，bd は 16*m.* を有すると明言して，17*m.* の可能性を全く考慮しない（supra p. 23）。

しかし，現実の Pa. 文献には時々 17*m.* の bd が現われ，そのすべてを必ずしも単純な text の損傷に帰する事はできない。筆者は 3*m.* の *base* を 2*m.* の一般形に対する特殊な変化形として一応承認し，その結果得られる 17*m.* の bd に限り原則として正当とする。それ以外の理由により 17*m.* となる場合は，何らかの metrical licence（v. 別稿§5）が働いているか，或いは text が損傷されていると考える。

筆者のこの立場はほぼ *Smith* に一致する。彼は，*base* として認める 4 形（: —; ◡◡; ◡ —; — ◡）の中，特に ◡ — と — ◡ をより古い段階のものとする。もっとも，◡ — と — ◡ が古いという根拠は示されていない。

Jacobi も，Pa. *vait.* の正当な bd として 17*m.* の形（— ◡ —, — ◡ ◡ —, ◡ — ◡ —）を認め，のみならずこれをすべての *vait.* の “Urtypus” とみなすに至る。しかし，この仮説を直ちに受け入れる事は困難である（v. supra p. 26）。

これと全く対照的に，*Warder*（§174）は 17*m.* の bd を一切否定し，text の損

傷でない限りは metrical licence により 16*m.* に還元すべきであると主張する。*Alsdorf* もこの主張に従い，17*m.* の bd をすべて訂正している。

ところで，筆者の出会った限りでは，*Ja.* に現われる *base* ⏑ — 又は — ⏑ を伴った 17*m.* bd の大半は，異読その他の状況から，強いて 16*m.* に還元するよりも，17*m.* の形に留めておく方がはるかに自然に感じられる。又，text の訂正の結果 17*m.* になると思われる *pd.* も少なくない（v. 別稿表2）。

しかしながら注目すべき事実は，この稀な形の *base* ⏑ — 又は — ⏑ が，どのような形の *opg.* に対しても同じ比率で現われるのではなく，実質的には — ⏑ — — ⏑ ⏑ という1つの形に集中している事である。この理由は不明であるが，*Jacobi* の "Urtypus" 説が想起される。以上のように，*base* ⏑ — 又は — ⏑ の設定には疑念が残るが，この問題の究明は他の text の更なる検討を待つ事にして，*Ja.* に関してはひとまず前記のように定める。

3.　《*opg.* の形態》

3.1.　*opg.* の一般的な形態は，2*m.* ずつ分割可能な形，即ち，ac : ⏑⏑ ⏑⏑ ⏑⏑，bd : ⏑⏑ ⏑⏑ ⏑⏑ ⏑⏑ である。⏑⏑ ⏑⏑ が ⏑ — ⏑ で代替される現象を *syncopation* と呼び，*opg.* の内部に自由に許す。但し，*opg.* と *cad.* の境界にまたがり *cad.* の形を破壊する *sync.* は認めない。又，連続する2つ以上の *sync.* の融合，即ち，⏑⏑ ⏑⏑ ⏑⏑ の代置としての ⏑ — — ⏑，　⏑⏑ ⏑⏑ ⏑⏑ ⏑⏑ の代置としての ⏑ — — — ⏑ も許されない。

i)　*Vutt.* を除く土着韻律書は一般的には *sync.* を禁じているが，同時に，このリズム ⏑ — ⏑ が *opg.* 中の特定の位置に固定された特殊な韻律として，*udīcya-vṛtti* 等を定めている（supra p. 23）。この外に，*He.* と *Jk.* には *sync.* の自由な韻律 *māgadhī* も登場する（supra p. 22）。従って，土着韻律書よりも古い段階では，一般の *vait. opg.* に於ても自由に *sync.* が行われていたと推測される。

Smith の見解（8.4 sqq.）は，*sync.* という術語を用いない事，及び *gaṇa* に対する考慮を除くと，筆者とほぼ一致する。*Warder*（§158 sq.）も実質的には同じ事実を述べているのだが，彼のいわゆる "proto-*gaṇa*" 内部ではこの現象を *sync.* と呼ばず，"proto-*gaṇa*" の境界を越えて引き起こされた場合にのみこの呼称を用いる。但し，彼が，*cad.* にまたがる *sync.* 及び *cad.* の最初の重音節の *resolution*（— → ⏑ ⏑）をも認めている事には賛成できない（v. infra ii)）。

ii)　*Jk.* 及び *He.* の *māgadhī*（supra p. 22）は，*vait. cad.* の最初の重音節を，いわば *opg.* に組み入れて，自由な変化を許している。この事から，Skt. 韻律に取り込まれる前の段階の *vait.* では *cad.* が ⏑ — ⏑ — だけであったが，Skt. 化されると同時にいわば前進拡大して — ⏑ — ⏑ — となり，やがては *pd.* 初めの 2*m.* 以外のすべての部分を覆う事になったのではないかと想像する事は不可

能ではない。しかし同時に，*vait.* の本来の *cad.* —◡—◡— が，後に *śl.* などの影響により ◡—◡— に縮小され，或いは *gch.* の影響で *cad.* 内部でも *resolution* が起こるようになったという可能性も考えられる。

いずれにせよ，*Ja.* に於ては *cad.* 内部の *resolution* を認め難い（但し，v. 別稿 §4 3.1.i))。又，*cad.* にまたがる *sync.* は重複を除くと3例ある（v. 別稿 §4 2.1.）が，1例は text が極めて疑わしく，1例は metrical licence により正常な *cad.* に訂正する事が不可能ではない。従って，*cad.* にまたがる *sync.* は許されないと考えてよいであろう。

a) *cad.* にまたがる *sync.* の1例は，N.458 *Udaya-ja.* °18ᵈ=°19ᵈ=°20ᵈ=°21ᵈ である：*udaye mā pamāda carassu dhammaṁ* (◡◡——◡—◡◡—◡——)。(v.1. D-C *pamādaṁ.*)他の *pd.* は正常な*aup.* である (v.別稿表1,2)。この "*pamāda*" は本来 *pamădo* (√*mad-*+*pra* の augment の付かない aor.[3] 2nd. sg.) であって，正しい *cad.* を作っていたと考えられる：*udaye mā pamădo carassu dhammaṁ* (◡◡——◡◡—◡—◡——)。

D. Andersen (A Pāli Reader, Part 1, Copenhagen 1901, p.126) が早くに指摘したように，Pa. canon を通じて一連の "*mā……pamādo*" の定句が韻律に反して用いられており，"*pamādo* (名詞 *pamāda-* nom.sg. と一致)" を "*pāmado* (augment の付いた aor.)" に訂正する事により韻律上の困難が解消される（前記の例では "*pamado*")。しかし，J. Brough (The Gandhārī Dharmapada, London 1962, p.194) 及び K.R.Norman (The Elders' Verses I, PTS 1969, §39) は，Pa. canon の編纂者達が特に韻律の細部に敏感であったとは考えられないとして，本来の形が "*pāmado*" であった可能性は認めながらも，実際の text の訂正には消極的である。

canon としての *Ja.* の成立をどのような段階に於て認めるかという事は極めて困難な問題であるが，少なくともこの定句に関しては，筆者は text の訂正により積極的であってもよいと思う。その理由は，1) この定句による韻律上の困難は *śl.*, *vait.*, *aup.* の各 *cad.* に散らばり，とりわけ *śl.* の偶数 *pd.* の *cad.* の形を損う事に canon の編纂者達が平気であったとは到底考えられない (*śl.*：*Ja.*N.521 47ᵈ=N.527 67ᵈ=N.540 125ᵈ；*vait.*：*vinaya* II p.195, *Dhammapada* 371ᵃ, *Ja.* N.415 8ᵃ (infra 4.2. iii) b))；*aup.*： supra 4*pd.*)。2) *śl.* の例では acc. "*dhammaṁ*"を支配しており，又上記 *aup.* では "*pamādo*" ではなく "*pamāda*" が現われているので，編纂者達によって完全に "名詞 *pamāda-* の nom.sg." と誤解されていたとは思えない。

b) *cad.* にまたがる *sync.* のもう1つの例は，N.545 *Vidhurapaṇḍita ja.* 28ᶜ である：*ete dumā pariṇāmitā.* (——◡—◡◡—◡—)。Fausbøll はこの *pd.* 末尾に *va* を加える事を提案するが，それでは韻律上の困難が解消され得ない。*Alsdorf* (p.34 c.p.31 n.) は上記の text をそのまま示し，"verderbt?" と付け加えている。

この *pd.* は次のような licence を考える事により正常な *vait.* として読む事ができる: *ete dumă pârinămitā*。nom. pl. -ă は極めてありふれた現象で問題はない。*pari*～*pāri* の metrical doublet は十分確立しているとは言い難いが，一連の doublet *paricariyā-*＝*pāricariyā-*, *parivāsika-*＝*pārivāsika-* 等の存在からの類推として，ここに認めてよいのではないだろうか（cf. F. Edgerton: BHS-grammar and Dictionary, II Dictionary s.v. "*pāripūrṇa-*"; *Smith*: "Les deux prosodies……" §5.3)。

c）残る1例は N.415 *Kummāsapiṇḍa-ja.* 9ᵃ である: *so 'haṁ tad eva punappunaṁ.* (— — ◡ — ◡ ◡ — ◡ —)。*tad eva→taṁ vâ* などの変化によって韻律は改善されるが，このような *sandhi* が実際に起り得るものかどうか疑問である（*eva→vā* に関しては, cf. Böhtlingk-Roth: Sanskrit-Wörterbuch (St. Petersburg 1855—75) s.v. "*vā*")。従って，この *pd.* の形は未解決のまま残される。

iii）連続する2つ以上の *sync.* の融合についてはどの韻律書も特に記していない。*sync.* の禁止されている Skt. *vait.* に於て *sync.* の融合が問題にならないのは当然である（*Weber* p.308 の説明は不適当, v. supra p.20—21n.3)。ところが困った事に *sync.* 禁止規定を欠く *Vutt.* に於ては，韻律形式の例文をも兼る条文自身が *sync.* の融合形を示している: 28ᵇ *same tv aṭṭha ra-la-gā tato 'pari* (◡ — — ◡ ◡ ◡ — ◡ — ◡ —)。"*samĕ tu aṭṭha*……" とでも読むのかと想像されるが，手元に資料がないためはっきりしない。

Ja. で見つけられるのは, bd *opg.* — ◡ — — ◡ 2例だけである（v. 別稿表2)。いずれも text 自身に疑いが持たれる。

1つは，N.421 *Gaṅgamāla-ja.* °8ᵇ: *khantisoracciyassa yo vipāko* (— ◡ — — ◡ — ◡ — ◡ — —)。(v.l. E-B^{df} °*-soraccassa*; D *khantīsoraccassa.*) *soracciya-* は, BHS *sauratya-* "優しさ" に対応する assimilation 形 *soracca-* と *svarabhakti* 形 *soraciya-* との混同形と思われるが，ここでは好ましくない。*khantîsoraccassa* (＝D) 或いは *khantîsoraciyassa* に text を訂正すべきであろう。この *ja.* の他の *pd.* はすべて *opg.* の最後に ◡ ◡ を示すので，後者がより望ましい。(複合語前肢の最終音節の重音節化（別稿§5 I 1.4.）については, cf. Geiger (v. infra p. 9n.3) §32, §33; Smith: "Les deux prosodies……" §3.6, §5.1, §5.2。)

残る1例は, N.449 *Maṭṭakuṇḍali-ja.* 6ᵈ である。この *pd.* は特殊な cad. — — ◡ ◡ — を持ち，極めて疑わしい（v. infra 4.2. iii) c))。

3.2.　bd の *opg.* に於ては6つの軽音節の連続が許されない。ac に於ては構わない。(即ち, bd *opg.* に対して，— ◡ ◡ ◡ ◡ ◡ ◡, ◡ ◡ ◡ ◡ ◡ ◡ —, ◡ ◡ ◡ ◡ ◡ ◡ ◡ ◡ の3形が禁じられる。)

i）V. supra p.23 c.n.4. 筆者の検討した範囲ではこの規則は完全に守られている。然るに, *Smith*, *Warder* らがこの点について沈黙しているのは奇妙な事で

ある。なお，*Weber*（p.309）が ◡◡◡◡◡◡◡◡ を禁止条項に含めていない事，及び *Jacobi*（p.594 sq.）が連続していない6つの ◡（e.g. ◡◡—◡◡◡◡）をも禁止と解している事は誤りである。*Apte* D.(b) の記述（"…the syllabic instants in the even quarter should not be all composed of short syllables or long syllables,…"）及び *Alsdorf*: "Uttarajjhāyā Studies" p.115 の記述（"…the 6 morae at the beginning of the odd, and 8 at the beginning of the even *pāda* should not consist wholly of long or wholly of short syllables."）はともに不可解。*Ja.* では，ac ——— はかなりの用例があり，ac ◡◡◡◡◡◡，bd ———— も皆無ではない（v. 別稿表1, 2）。

何故，6つの ◡ 連続が bd に限り禁じられ ac に対しては許されるのか，理由はわからないが，一般に *opg.* 形態としては3つ以上の ◡ 連続が回避される傾向にある。特に，4つ以上の ◡ 連続は，ac —◡◡◡◡ と ac ◡◡◡◡◡◡ を除き，極めて稀である（v. 別稿表1, 2)。（Apabhraṁśa 的な新しい韻律に見られる ◡ 連続を好む傾向に対し，古い韻律に共通する ◡ 連続を回避する傾向については，cf. Smith: "Les deux prosodies…" §5.1.）

4.　《*cad.* の変動》

4.1.　*vait. pd.* と *aup. pd.* は時として同一詩節中で混用される。（但し，単なる text の損傷がこのように誤解される場合もある。）

i）*vait. pd.* と *aup. pd.* との同一詩節内での混用は広く知られている（*Smith* 8.4; *Warder* §123)。しかし *Ja.* では，*Warder* の述べるような規則的な *vait. pd.* と *aup. pd.* の交代は見られない。（v. 別稿 §4 2.5.)。*Ja.* に於る混用例7例中，6例は 1*pd.* だけ *vait.* の混った *aup.*，1例は *vait* 2*pd.* に形の崩れた *aup.* らしき 2*pd.* の組合された詩節であるが，その中の幾つかは本来完全な *aup.* であった可能性がある。

a）N.458 *Udaya-ja.* °21 に於て，E は *aup.* abd に対して c だけを *vait.* で示す：*ittaravāso ti jāniyā.*（v.l. D *jāniyāna*, D-S *jānitvā*, D-C *jāniyā.*）*jāniyā* は √*jñā-* の pres. stem から新に作られた absolutive である。abs. suffix *-yā* は，metri causa の範囲を越えて広く *ṚigVeda* で用いられたものであるが（Wackernagel-Debrunner: Altindische Grammatik II.2. p.781），Ardhamāgadhī に残っているという説もある（K.R. Norman: "Some Absolutive Forms in Ardha-Māgadhī", IIJ II 1958 p.311—5）ので，Pa. に用いられても不思議はない。しかし，この *pd.* 末の位置では表記にかかわらず常に重音節として扱われるのであるから，特にここに abs. suffix *-yā* が残されているのは奇妙である。従って，D *jāniyāna* が本来の形（*aup.*）ではなかったかと推測される。

b）同様に N.508 *Pañcapaṇḍitapañha-ja.* °1 に於ても，E は a だけを *vait.* とする：*pañca paṇḍitā samāgatā.*（v.l. D *samāgatā'ttha.*）完全な *aup.* 詩節を作る D の形の方が好ましい事は言うまでもない。

c） *vait.* 2 *pd.* と *aup.* らしき 2 *pd.* から成る N. 111 *Gadrabhapañha-ja.* 1 は非常に形が崩れているため，本来の形を復元する事が困難である。

a　*haṁsi*[1] *tuvaṁ evaṁ*[2] *maññesi*[3] *seyyo* (—◡◡——————◡——),

b　*puttena pitā ti*[4] *rājaseṭṭha* (——◡◡—◡—◡——),

c　*hand' assatarassa te ayam* (——◡◡—◡—◡—),

d　*assatarassa hi gadrabho pitā* (—◡◡—◡◡—◡—◡—). (v.l. 1. E-B[d] *hasi*; D *haṁci*. 2. D *evamaññasi*. 3. E-B[d] *maññāsi*. 4. D-B[d] *hi.*)——

(訳)「父は子よりもまさっている」と，もしもあなたがこのようにお考えでしたら，最勝なる王よ，何とまあ，あなたにとってはこれ（ロバ）がラバよりも〔まさっているという訳でございますか！〕ロバはラバの父親でございますから。——

cd は正常な *vait.* で，Fausbøll の注記 "add pi?" は不要である。最も自然な解決は ab を *aup.* ととる事であるが，その場合 b の *opg.* が *2m.* 不足する。あまり重要でない *2m.* の語 (e. g. kho) が脱落したかとも想像できるが，支持するものは何もない。

a_1　*haṁsi tuvaṁ evā mañně seyyo* (—◡◡——◡—◡——),

b_1　*puttena* <*kho??*> *pitā ti rājaseṭṭha* (——◡<—>◡—◡—◡——).

ab 間の *pd.* 区分を移動すれば，*vait.* の a が得られるが b は *9m.* opg. —◡——◡◡ (v. supra 2. 2. i)) を伴う aup. となる。

a_2　*haṁsi tuvaṁ evā maññasi* (—◡◡— —◡—◡—),

b_2　*seyyŏ puttena pitā ti rājaseṭṭha* (—◡——◡◡—◡—◡——).

いずれにせよ憶測の域を出ない。(*pd.* 区分の移動に関しては，v. 別稿 §4 3. 2.)

4. 2.　同じような同一詩節中での混用が *vait.* と *āpāt.* の間でも予想されるが，*Ja.* に於てははっきりした例がない。ただ，極めて稀に，正常な *vait.* 中に於て，*cad.* —◡—◡— の代りに特殊な *cad.* ——◡◡— 及至は —◡◡—— を伴う *pd.* が見つけられる。この *cad.* の形が，伝承過程の単なる損傷によるものか，或いは一種の変化形として最初から容認されていたのか，現在の段階では決定できない。

i） *vait.* と *āpāt.* の混合詩節としては，たとえば *Theragāthā* 1218—20, 1222 がある。一連の *veg.* (*Smith*=Norman, 筆者の分類では *āpāt.*) 詩節 1214—22 の中，1218[a] 1219[ac] 1220[a] 1222[a] の各 *pd.* が *vait.* の形を示す。この前後の韻律の形がかなり崩れているので，canon として成立した段階で既に *vait. cad.* が用いられていたかどうか不明であるが，現在の text が *vait. cad.* の混用を承認している事は間違いないであろう (cf. K. R. Norman: The Elders' Verses I, p. 290—2)。

ii） 上記の特殊な *cad.* を持つ *pd.* の特色は，*gaṇa* に区分された時，第 3・第 7 *gaṇa* に ◡—◡ のリズムを回避し，古 *āryā*[4)] に極めて接近した形を示す事である。実際に，Fausbøll はこのような *pd.* の 1 つを誤って *āryā* の如くに表記

している (v. infra iii) c))。なお，*cad.* にまたがる *sync.* を有する *vait. pd.* も，*gaṇa* に分けられた時，第2・第6 *gaṇa* に ◡—◡ のリズムをもたらし，正常な *vait. pd.* よりも古 *āryā* に近づく事が注目される。作詩された当初からこのような形であったかどうかは別として，長い伝承過程に於てこれらの異常な *pd.* がほとんど異読もなく保持されてきたのは，*āryā* との類似現象に支えられての事と考えられる。

iii) 上記の特殊な *cad.* を伴う *pd.* は *Ja.* 中に5例見つけられる (v. 別稿 §4 2.2.)。

a) N. 112 *Amaradevīpañha-ja.* (=N. 545 *Mahāummagga-ja.* I *Channapathapañha*) 1は 6*pd.* から成る非常に形の崩れた詩節である。

a　*yena sattu bilaṅgā ca* (—◡—◡◡———),

b　*dviguṇapalāso ca pupphito* (◡◡◡◡——◡—◡—),

c　*yenādāmi*[1] *tena vadāmi* (———◡—◡◡——),

d　*yena nādāmi*[2] *na tena vadāmi*[3] (—◡——◡◡—◡◡——),

e　*esa maggo Yavamajjhakassa* (—◡——◡◡—◡——),

f　*etaṁ channapathaṁ vijānāhi* (———◡◡—◡———). (v. l. 1. E-B^d 及び D *yena dadāmi*. 2. E-B^d 及び D *yena na dadāmi*. 3. E-B^d *tena na vadāmi*, C^k 欠落)——(訳) その道を進んでゆくと大麦の挽割粉〔を売る店〕とおかゆ〔を売る店〕があり，複葉樹 (*koviḷāra* 樹) が花咲いている。それによって食べるもの (右手) によって私は〔道を〕告げる，それによって食べないもの(左手) によっては私は〔道を〕告げない (v. infra c_2 d_2)。これが *Yavamajjhaka* へ行く道である。この隠された道をあなたは理解せよ。——

a は *śl.*, b は *vait.* (但し *opg.* が 2*m.* 不足), cd は *cad.* —◡◡—— を伴い，*opg.* も少しおかしい。e は不明だが *aup.* に近い。f は少し *cad.* の崩れた *vait.* である。*Mahāvastu* (ed. É. Senart, Paris 1882—97) II p. 86 に対応する2詩節が存在する。

(1) ab　*yena saptābhiraṅgā ca dviguṇapalāśā ca pādapāḥ,*

cd　*yena aśeṣi na tena vrajesi na tena aśesi.*
(ママ)　(ママ)

(2) ab　*yato yavā kadākhyā ca kovidārā ca phullitā,*

cd　*vāmaṁ mārgaṁ grahetvāna gacchāmi Yavakacchakaṁ.*

(1) の a *saptābhiraṅgā* は Pa. の *sattu-* (Skt. *saktu-*) と *bilaṅga-* (語原不明) を誤解したもの。(2) c *vāmaṁ* も誤りである (*imaṁ?*)。(2) は *śl.*, (1) は a が *śl.*, bcd はひどく崩れている。

どの点から見ても，Pa. *Ja.* の詩節の方が *Mahāvastu* のそれよりも本来的であるが，Pa. *Ja.* の詩節自身も多くの問題を含んでいる。

まず，*vait.* が 6*pd.* を有する事は極めて異例である (v. 別稿 §4 3.1.)。しかし ab (*śl.*?) と cdef (*vait.*?) との2つの詩節に分割するには，更に 2*pd.* が必要である。ひとまず，a〜f 全体で1つの *vait.* とみなすと，ab に対しては次のよう

な形を想像する事ができる。しかし支持する異読等は何もなく，又他の可能性も考えられる。

a_1　*yena⟨ṁ⟩ sattû bilaṅgă ca* (— — — — ◡ — ◡ —),

b_1　*d⟨u⟩viguṇâpalāso ca pupphito* (◡ ◡ ◡ — ◡ — — ◡ — ◡ —),

b_2　*dviguṇapalāso c' ⟨eva⟩ pupphito* (◡◡◡◡ — — — ◡—◡—).

(instr. sg. *-enaṁ* については, cf. R. Pischel: Comparative Grammar of the Prākṛit Language (tr. by S. Jhā, 2nd. ed. Delhi 1965) §182, §364. *-enā* かも知れない, cf. Altindische Grammatik III p. 92, p. 499. 複合語前肢最終音節の重音節化は, v. supra 3.1. iii).)

c〜f が *vait.* の仲間である事は間違いない。f は容易に正常な *vait.* に訂正される（*vijānăhi* に関しては, cf. Smith: "Les deux prosodies…" §10.3)。

f_1　*etaṁ channapathaṁ vijānăhi* (— — — ◡ ◡ — ◡ — ◡ —).

e の原形を推定する事は困難である。幾つかの可能性が考えられるが，いずれも裏付けを欠く。たとえば,

e_1　*esa maggŏ yâvamajjhako* (*vait.*),

e_2　*esa maggŏ yâvamajjhakassa* (*aup.*).

cd は, *cad.* — ◡ ◡ — — を伴う。c の *opg.* *7m.*, d の *opg.* *9m.* の訂正はむつかしくないが, d は *9m.* のままでもよい（v. supra 2.2.)。(open syllable で同母音の結合結果が短母音となるような *sandhi* は普通には知られていないが, metrical licence として若干数の箇所で認められる, v. 別稿 §5 1.1.)

c_1　*yenădāmi tena vadāmi* (— ◡ — ◡ — ◡ ◡ — —),

d_1　*yena nădāmi na tena vadāmi* (— ◡ ⏓ — ◡ ◡ — ◡ ◡ — —).

さて，この cd の *cad.* は, *āpāt.* 的変化形としてこのまま承認すべきであろうか。それとも本来は正常な *vait.* で作られていたのであろうか。ここで注目されるのは, *Mahāvastu* では *vadāmi* の代りに *vrajesi* を示している事である。H. Lüders: Beobachtungen über die Sprache des Buddhistischen Urkanons (Berlin, Abh. d. deutschen Akad. d. Wiss. zu Berlin, 1954) §106 は, *vraj-* の方が *vad-* よりもよりよく文脈に合う事，及び両者共に東部方言では *vay-* となる事から, Pa. と *Mahāvastu* の共通の原形として *vayāmi* (√*vraj-*) を考える。しかしこの説によっても，韻律上の困難は依然として解決されない。筆者は，むしろ *vajjati* (√*vad-* の pass. 3rd. sg.) の可能性を考える。主語を e の *esa maggo* と解すれば文脈上不自然でない上に，正しい *vait.* *cad.* を与え，しかも *vad-*, *vraj-* どちらにも形が通う。従って,

c_2　*yenădāmi tena vajjati* (— ◡ — ◡ — ◡ — ◡ —),

d_2　*yena nădāmi na tena vajjati* (— ◡ ⏓ — ◡ ◡ — ◡ — ◡ —).

b) N. 415 *Kummāsapiṇḍa-ja.* 8ᵃ (*cad.*: — ◡ ◡ — —) の場合は, N. 458 *Udaya-ja.* °18ᵈ °19ᵈ °20ᵈ °21ᵈ の場合と同様に, "*mā.* …*pamādo*" の定句が問題となる。本来の形は "*pāmado*" と推測される（v. supra 3.1. ii) a))。

a　*dada bhuñja ca mā ca pamādo* (◡ ◡ — ◡ ◡ — ◡ ◡ — —),
a_1　*dada bhuñja ca mā ca pâmado* (◡ ◡ — ◡ ◡ — ◡ — ◡ —).

c) 残る2例は，N. 449 *Maṭṭakuṇḍali-ja.* 6^d 7^b である。この 2*pd.* の *cad.* は — — ◡ ◡ — で，*āpāt.* とは関係ない。6^d は *opg.* もおかしい（連続する2つの sync. の融合，v. supra 3.1. iii)）。E は恐らく *āryā* と誤解したらしく，6を2行詩の形で示している（v. 別稿 §4 4.2.）。

6a　*gamanāgamanam pi dissati* (◡ ◡ — ◡ ◡ — ◡ — ◡ —),
b　*vaṇṇadhātū*[1] *ubhay' ettha vīthiyo* (— ◡ — — ◡ ◡ — ◡ — ◡ —),
c　*peto pana n'eva dissati* (— — ◡ ◡ — ◡ — ◡ —),
d　*ko nu kho kandataṁ balyataro*[2] (— ◡ — — ◡ — — ◡ ◡ —).
7a　*saccaṁ kho vadesi māṇava* (— — — ◡ — ◡ — ◡ —),
b　*aham eva kandataṁ balyataro*[2] (◡ ◡ — ◡ — ◡ — — ◡ ◡ —),
c　*candaṁ viya dārako rudaṁ* (— — ◡ ◡ — ◡ — ◡ —),
d　*petaṁ kālakat' ābhipatthaye* (— — —◡ ◡ — ◡ — ◡ —).

(v. l. 1. D *vaṇṇadhātu.* 2. E-C^{ks} *balyakaro*; D *bālyataro.*)——(訳) 6.〔日と月については〕昇ってゆくのも沈むのも見える。ここ（大空）に，ちゃんと目に見える両方の道がある。しかし一旦死んだ人間はもう見えない。泣いている〔私達二人〕の中で，一体どちらがより愚かであろうか？ 7. まことに君の言う通りだ，少年よ。私こそが，泣いている〔二人〕の中でより一層愚かな者である。月を〔欲しがって〕泣く子供のように，逝ってしまった故人を私は求めているのだ！——

同じ話が，*Vimānavatthu* (ed. E. R. Gooneratne, PTS 1886) p. 75 sqq. (=°-*aṭṭhakathā*, ed. E. Hardy, PTS 1901, p. 322 sqq.), *Petavatthu* (ed. J. P. Minayeff, PTS 1889) p. 18 (=°-*aṭṭhakathā*, ed. E. Hardy, PTS 1894, p. 92) 及び *Dhammapadaṭṭhakathā* (ed. H. C. Norman, PTS 1906—14) I. p. 93—100 に現われ，6^d 7^b に対応する *pd.* は次のようになっている。

(6^d に対し)　*ko n'īdha* (又は *n'idha*) *kandataṁ bālyataro.*
(7^b に対し)　*aham eva kandataṁ bālyataro.*

現在の *Ja.* text に基いて，正常な *vait.* の形を様々に考える事ができるが，いずれにせよ支持する異読もなく，想像の域を出ない。たとえば，

$6d_1$　*ko nu khŏ kandatã bâl⟨i⟩yâtaro* (— ◡ ⏑̲ — ◡ ◡ — ◡ — ◡ —),
$7b_1$　*ahaṁ va kandatã bâl⟨i⟩yâtaro* (◡ — ◡ — ◡ ◡ — ◡ — ◡ —).

この想定では，*ahaṁ va* の *sandhi* に困難がある（v. supra 3.1. ii) c)，別稿 §5 1.3.）。

—— §3 注 ——

1. E を底本とする。但し，N. 536 *Kuṇāla-ja.* に限り，*Bollée* を底本とする。
2. 若干の遺漏がある筈である。ちなみに，*Warder* の調査によると *Ja.* の

vait./*aup.* は計 370 *pd.*（重複を除くと 348 *pd.*）である。*Alsdorf* ~~(p. 26 n. 11)~~ は，重複を含めると *Ja.* に 101 詩節存在すると述べている。但し，*Alsdorf* の挙げている *Mahāummagga-ja.* I 83（＝N. 508 *Pañcapaṇḍitapañha-ja.* 22）は，*tri.* の誤りである。以上の外に，*vait.* から発生した *ach.* *rathoddhatā*（supra p. ~~22~~ (163)）が19詩節存在するが（N. 536 *Kuṇāla-ja.* 61—79），*mch.* の中には含まれない。

3.　Pa. では augment の有無にかかわらず，aor. が *mā* を伴い禁止法として用いられる。injunctive の意識は全く失われている。aor. に於る augment の付き方については，cf. W. Geiger: Pāli Literature and Language (tr. by B. Ghosh, Calcutta 1943) §158.

4.　古 *āryā* の形式は次の通り（｜は *gaṇa* 区分，‖ は休止を示す）:

新 *āryā* は，これに対し，第3 *gaṇa* の後に休止が移り，第2行目第6 *gaṇa* が ◡ 1つに短縮されている（cf. supra ~~p. 26~~；*Jacobi* p. 596；*Alsdorf*: Die Āryā-Strophen…, p. 9 sq.）。